

# 森美術館 館長交代のお知らせ

2006.9.28

森美術館（港区六本木ヒルズ）は、館長デヴィッド・エリオットが5年間の任期満了に伴い2006年10月末日をもって退任することを昨日の記者会見にて発表いたしました。

エリオットは、日本初の外国人美術館館長として2001年秋に森美術館初代館長に就任し、これまで日本になかった新しい美術館の活動のディレクションや組織づくりなどに力を注ぎました。また2003年10月の開館以来、数々の画期的な展覧会を企画し、森美術館の最初の重要な3年間に率いました。

エリオットは館長退任後、森美術館のインターナショナル・アドバイザリー・コミッティーのメンバーとして森美術館に関わるとともに、イスタンブール・モダン（トルコ共和国）の初代館長に就任予定です。

なお、後任には11月1日、これまで副館長としてエリオットをサポートしてきた南條史生が就任いたします。

エリオットが築いた体制とミッションのもと、南條の展覧会企画ノウハウや国際的ネットワークを生かしながら、森美術館は新たな活動をまたさらに展開してまいります。



<参考：南條史生（なんじょう・ふみお）略歴>

1949年東京生まれ。慶應義塾大学経済学部、文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。国際交流基金、ICA ナゴヤ ディレクター、ナンジョウアンドアソシエーツを経て、2002年 開館準備室より森美術館副館長。AICA（国際美術評論家連盟）副会長、CIMAM（国際美術館会議）評議員。慶應義塾大学講師。主なプロジェクトとして、1997年第47回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、98年台北ビエンナーレ コミッショナー、ターナー・プライズ（英国）審査委員、99年アジアパシフィック・トリエンナーレ（オーストラリア）コ・キュレーター、2000年シドニー・ビエンナーレ国際選考委員、ハノーバー国際博覧会日本館展示専門家、2001年横浜トリエンナーレ2001アーティスティック・ディレクター、2005年第51回ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞審査員、2006年第1回シンガポール・ビエンナーレアーティスティック・ディレクターなどを歴任。

お問い合わせ

森美術館 広報部 担当：コーキル、高橋、犬塚

Tel: 03-6406-6111 Fax: 03-6406-9351

E-mail: [pr@mori.art.museum](mailto:pr@mori.art.museum) Web: [www.mori.art.museum](http://www.mori.art.museum)

106-6150 東京都港区六本木 6-10-1 六本木ヒルズ森タワー

**PRESS RELEASE**  
**プレスリリース**

MORI ART MUSEUM

MORI ARTS CENTER

# 館長交代によせてー開館からの歩みと次なるステップ

森美術館 理事長 森 佳子

2006年9月27日

森美術館は10月18日で3周年を迎えます。開館からは満3年ですが、その準備は6年前に遡ります。「六本木ヒルズ」という新しい街を構想し、文化都心にしたいというコンセプトを固めた当初からその中心に美術館を作りたいと考えました。そして美術館を今を生きる人々に直接働きかけられるような現代アート中心の展開にすべく、その分野での館長を世界を視野に入れて探し、招聘したのがデヴィッド・エリオットでした。エリオット館長の就任は、日本の美術界初めての外国人館長として、当時冬の時代と言われた日本の美術界に新風を吹き込む事が期待されました。2001年秋にはエリオットが来日し、開館2年前から森美術館のミッションづくりや組織・運営方針、そして開館記念展を含めて展覧会プログラムの準備を進め、2003年10月18日の開館に到りました。

森美術館開館記念展「ハピネス：アートにみる幸福への鍵」展は好評を博し、総入館者数は73万人を越え、一日の平均入館者数7860人はこの年の記録として世界一になりました。わかりやすい切り口で、よく知られる名画や伝統的な美術品と共に最新の現代アートを展示するという大規模な企画は、世界でも類のない試みとして、現代アートへの感心と理解を深める大きな一歩を刻みました。これは同時に、美術館が街全体の文化度を高め人々の生活を豊かにするという、森美術館の基本理念を実現する端緒となりました。続く「六本木クロッシング」展では、多様なジャンルの現代日本のクリエイターを多数紹介したほか、大きな話題となった「杉本博司：時間の終わり」展、最近では専門家から高い評価を得た「東京ーベルリン展」や「アフリカ・リミックス」展などエリオット館長監修のもと、常に新しい刺激と活力に満ちた視点を提供し続けることができました。日本になかった新しいタイプの美術館づくりを意欲的に推進し、館長として期待をはるかに越える役割を果たしてくれたと感じております。この度は館長就任5年満了に伴い、また他館からもエリオット氏への要請があることから館長交代の時期を迎えたことをお知らせいたします。エリオット氏には、今後インターナショナル・アドバイザリー・コミッティーのメンバーとして森美術館に関わっていただくこととなります。

新館長にはこれまで副館長としてエリオット館長と共に森美術館を指揮してきた南條史生が就任いたします。南條は、最近ではシンガポール・ビエンナーレのアーティスティック・ディレクターを務めるなど国際的な活動で知られており、その実績を活かした企画や人的交流の中心となることを期待しております。

森美術館は今後も当館の展覧会の特色であるテーマ性を持った独自の切り口で、国内外にアートの新たな発見を提示し、都心の文化発信地としてより多くの皆様に芸術に親しんでいただける場を提供してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

**PRESS RELEASE**  
**プレスリリース**

MORI ART MUSEUM

MORI ARTS CENTER

# 森美術館という新しい美術館の開設に携わったこと

デヴィッド・エリオット

2006年9月27日

5年前に森美術館の初代館長として東京に誘われた時、私はその話に飛びつきました。現代アートの美術館の新設は稀ですし、東京は世界でも指折りの魅力ある首都だからです。当初「日本人はあまり現代アートを好まない」との助言もありましたが、蓋を開けてみると、森美術館は数多くの来館者で賑わい、好奇心の強い観衆が大いにアートを楽しめました。私たちが主催した現代アートや建築、デザインの展覧会を含めたさまざまな文化的イベントに多くの方が積極的に参加されたのです。

2001年2月、初めて新しい美術館の建設予定地を訪れた際に私は工事中の地面の穴を覗き、その高層階に森美術館が入ることを思い描きながら、ビジネスと商業と文化を創造的に融合させ、各々が対等な立場でよい影響を与えあうという森 稔氏のヴィジョンに感銘を受けました。そして私はストックホルムへ急いで戻ると、数日中に森美術館の“ミッション”と“ヴィジョン・ステートメント”を仕上げたのです。

高層ビル53階でアート&ライフと一緒に提示するミッションは今、既に達成しました。また現代アートの展覧会を世に送り出す重要な場として森美術館をアジア地域から世界中に定着させるヴィジョンもほぼ実現できたと思っています。

日本ならびに東アジアのアーティストの作品を展示する場を提供するという考えは、森美術館の理念の中心です。これまで開催した展覧会はその理念に基づき、それは来年秋に開催予定の第2回「六本木クロッシング」展でも明示されることでしょう。さらに、アジアの現代アートのコレクションを始めることでその理念は肉付けされていきます。

森美術館はアートにおける質について、常に批評的対話をするための建設的な場を創り出し、パブリックプログラム（教育普及活動）では大きな成果を糧に今後さらなる発展を目指しています。そして森美術館では全ての発信を日・英バイリンガルで行い、活動をより広く世界に知らせる試みを当初から続けています。それは、カタログ等の出版物だけでなく「東京―ベルリン／ベルリン―東京展」（ドイツへ巡回）や「杉本博司：時間の終わり」展（アメリカ数カ所へ巡回）など、好評を博している国際巡回の展覧会を通じて実践してきました。

私が館長として東京で行う最後の展覧会が「ビル・ヴィオラ：はつゆめ」展であるのは感慨深いものです。ヴィオラ同様私も日本、アジアのアートと精神性に影響を受けました。そして私自身のキャリアも、時には暗い森を通る道のように、終着点は遥か彼方です。私の次の仕事はトルコの新しい近現代美術館、イスタンブール・モダンの初代館長です。そこでもまた新たな発見や挑戦が待っていることでしょう。私は東京での年月を存分に楽しみ、充実した仕事に携われたことをたいへん光栄に思っています。新しい美術館の館長として招聘して下さった森 稔、佳子夫妻には深く感謝申し上げます。また、森美術館の発足と活動のために尽力したスタッフにも感謝の意を表したいと思います。

これからも日本との愛しいつながりを断つことなく、インターナショナル・アドバイザリー・コミッティーの一員として、引き続き森美術館とは関わっていきます。将来、誰も想像しなかった新しいアートや建築、デザインの最良の作品を古代都市イスタンブールでお見せするべく、皆さんをご招待することを楽しみにしています。

**PRESS RELEASE**  
**プレスリリース**

MORI ART MUSEUM

MORI ARTS CENTER

# 森美術館第二代館長に就任するにあたって

南條史生

2006 年 9 月 27 日

このたび、森美術館創設者の森 稔氏、森美術館理事長 森 佳子氏より、当美術館の第二代目館長を務めることを依頼され、これを喜んでお受けすることにいたしました。

初代館長を務めましたデヴィッド・エリオット氏は森美術館の立ち上げ、組織づくり、開館記念展の組織、そしてその後 3 年間にわたる運営を陣頭指揮し、専門的な経験と知識をもって森美術館を内外のトップクラスの美術館の地位に据え、またその評価を揺るぎないものにしてくれました。この功績は疑いようもなく、またこうした活動を支える副館長の役割を果たせたことは、私自身にとってもすばらしい経験でありました。第二代目を引き継ぐ館長としましては、エリオット氏の確立した高い業績と評価を、今後いかに維持し、発展させ、またさらなる評価につなげていくかという、困難で挑戦しがいのある課題を与えられ、身の引き締まる思いです。

当面は、現在予定されている企画を逐次遂行いたしますが、将来はさらにユニークな企画を提供し、内外のアーティストやキュレーター、観客のハブとなり、新たなネットワークを構築できるような美術館にしていきたいと考えています。中でも、アジアに焦点を合わせた企画、世界の現代アートの最先端を紹介する企画、あるいは日本のアーティストを内外に紹介する企画などを重視したいと思います。また、パブリックプログラム（教育普及活動）の充実、海外の美術館との連携、日本の美術界との協同、さらに多様な観客に対する多様なサービスの提供を行い、これまで以上に活発な人の交流の場を作りだしていきたいと考えております。

美術館は今やメディアです。それはアートを通して多くの人々の新しい考えや多彩な情報を紹介し、娯楽性と啓蒙的役割が同居する新しい存在なのです。もはや既存の美術館は、われわれのモデルにはならないでしょう。21 世紀の東京において、いかなる美術館が可能なのか、その問いに応えられる美術館を模索するべきだと思います。それは楽しく、また知的好奇心を刺激する美術のワンダーランドとなるでしょう。

今後もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

**PRESS RELEASE**  
**プレスリリース**

**MORI ART MUSEUM**

MORI ARTS CENTER